

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 17 日現在

機関番号：32678  
 研究種目：基盤研究（C）  
 研究期間：2010～2012  
 課題番号：22530880  
 研究課題名（和文） ドラマによるコミュニケーション能力育成のための保育者養成プログラム開発  
 研究課題名（英文） Developing of Teacher Training Program for Kindergarten and Nursery School to Develop Communication Skills through Drama  
 研究代表者 小林 由利子  
 (YURIKO KOBAYASHI)  
 東京都市大学・人間科学部・教授  
 研究者番号：50245297

研究成果の概要（和文）：研究目的は、子どもの「劇的遊び」をルーツとするドラマを保育者養成プログラムに応用し、コミュニケーション能力育成のためのプログラムを開発することである。研究方法は、仮説保育者養成プログラムを作成し、実施し、記録し、振り返り、修正プログラムを作成し、実施するプロセスを繰り返し、最終版ドラマによるコミュニケーション能力のための保育者養成プログラムを開発することである。研究成果は、インプロビゼーションとDIEを組み合わせたプログラムとクリエイティブ・パペトリーとクリエイティブ・ドラマを組み合わせたプログラムを開発した。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to develop the program of Teacher Training Program for Kindergarten and Nursery School through drama to sharpen communication skills. Drama is rooted in children's dramatic play. The method is to plan a program, do it, reflect it, plan it again, and do it again. This process has been repeated until creating the final program. The result is that there are two programs: one is to link between improvisation and DIE, the other is to link creative puppetry and creative drama.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	2,100,000	630,000	2,730,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：ドラマ／演劇教育、児童演劇、幼児教育、教員養成

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：ドラマ教育、演劇教育、保育者養成、コミュニケーション、カリキュラム

### 1. 研究開始当初の背景

(1) ドラマ／演劇教育に関する背景

保育者が子どもの「遊び」を援助し、指導し、ともに発展させていくためには、子どもの遊びに自然に入っていく必要がある。しかし、現在幼児教育・保育を学んでいる学生たちは、他者と身体接触をしたり、非言語的・言語的にコミュニケーションしたり、空間を

共有したり、かかわったり、協働したりすることを避ける傾向がある。そこで、活動の中で他者との協働とコミュニケーションを求められるドラマ／演劇を保育者養成に応用できるのではないかと考えた。

1970年代から演劇を教員養成に応用する活動は、宮城教育大学の竹内敏晴を中心に行われていた。しかし、この活動が全国の教員

養成課程に影響を及ぼすには至らなかった。

(2) ドラマ／演劇教育に関する現在の状況  
最近、平田オリザが演劇をコミュニケーション教育に応用することを強調し、小中学校においてプロの俳優が、生徒たちのコミュニケーション能力を育成するためにワークショップを実施する活動が増えてきている。

さらにドラマ／演劇教育に関する研究や本の出版が相次いでいる。たとえば、『ドラマ教育入門』（小林由利子・中島裕昭他，図書文化，2010）、『教師：学びの演出家』（渡部淳，旬報社，2007）、『インプロ教育：即興演劇は創造性を育てるか』（高尾隆，フィルム・アート社，2004）、『学校という劇場から－演劇教育とワークショップ－』（佐藤信編，論創社，2011）、『学びを変えるドラマの手法』（渡部・獲得型教育研究会編，2010）、『学びへのウォーミングアップ－70の技法』（渡部・獲得型教育研究会編，旬報社，2011）などがある。

しかしながら、具体的なドラマ／演劇による教員養成及び保育者養成プログラム開発は、まだ十分に研究され、開発されていない。また、子どもの遊びをルーツにしたドラマと演劇の関係性についての研究は、欧米と比較すると遅れているのが現状である。

そこで、本研究では、遊び／ドラマ／演劇連続体という考え方にに基づき、欧米のドラマ教育を日本の保育者養成にどのように応用していくかについて実践的に研究する。

## 2. 研究の目的

演劇作品の上演を目的にしない演じること自体を目的にした過程中心のドラマ活動を通して、学生たちのコミュニケーション能力を育成するための新しい保育者養成プログラムを開発することである。

(1) コミュニケーション能力、表現力、子どもの遊び、ドラマ等の専門用語について定義する。

(2) 欧米の主要なドラマ活動の実践者の理論と方法論を整理する。

(3) 欧米のドラマ教育の理論と方法論を日本の現在の学生の現状に即したドラマによる仮説保育者養成プログラムを作成し、実践し、修正する。これを繰り返して、最終版のドラマによるコミュニケーション能力育成のための保育者養成プログラムを開発する。

## 3. 研究の方法

(1) ドラマによる仮説保育者養成プログラムを作成し、実施する。

(2) このドラマ活動をエスノグラフィーにより記録する。補助的にビデオ撮影をする。(3) 活動終了後に実践者と観察者とで振り返りを行う。

(4) 実践者はフィールドノーツをつける。

(5) これらを踏まえて修正プログラムを作成し、実践する。

(6) 上記のプロセスを繰り返し最終版ドラマによるコミュニケーション育成のための保育者養成プログラムを作成する。

## 4. 研究成果

### (1) ドラマ／演劇教育に関する理論研究

① 欧米の最新の情報を論文・雑誌等で日本に紹介することができた。

② まだ日本に紹介されていなかったジョー・ウィンストンのドラマ活動について実際に活動を経験したことに基づき、論文として日本に紹介することができた。

③ アメリカのクリエイティブ・ドラマとイギリスのDIE (Drama in Education) を連続体として考え、保育者養成プログラムを開発につなげることができた。

### (2) ドラマによる保育者養成プログラム開発

① 即興性の高いインプロビゼーションのゲームで構成されたコミュニケーション能力育成のためのドラマによる保育者養成プログラムを開発した。

② インプロビゼーションとDIEとをスムーズにつなげたプログラムを開発できた。

③ ドラマ活動の記録と評価に関して、ニュージーランドの幼児教育カリキュラムである「テ・ファリキ」と「ポートフォリオ」と「ラーニング・ストーリー」を参考にし、保育者養成プログラムに試作的に応用することができた。しかし、これらに関しては継続した研究が必要である。

④ インプロビゼーションで育成されたコミュニケーション能力を基盤にしてクリエイティブ・パペトリーとクリエイティブ・ドラマというドラマによる保育者養成プログラムを開発した。

### (3) コミュニケーション能力育成

① 参加者である学生たちが、自らコミュニケーション能力が育成されたという評価を振り返り、学生のレポート、授業評価結果から得ることができた。

② ビデオ撮影を拒否する学生がいたので、計画した方法論で実施することが困難であった。そこで、学生自身がコミュニケーション

ョン能力に関して、高まったかどうかを自己評価するという観点を加えた。

#### (4) インプロビゼーションとDIEいうドラマを使った保育者養成プログラム

保育者を目指し入学してきた学生たちを対象にした「ドラマワークショップ」という授業において、主にアメリカのヴァージニア・グラスゴー・コウステイ (Virginia Glasgow Koste) の開発したインプロビゼーションをもとにしてコミュニケーション能力育成のための保育者養成プログラムを開発した。プログラムは以下の通りである。

- ①名前のゲーム：学生自らがニックネームを決め、ゲームを通してそれらを徐々に数を増やしながらかえる。
- ②名前とボール：相手のニックネームを呼びボールを投げる。  
フルーツバスケット：子どもの遊びを実際に経験することを通して、遊びについての理解を深める。  
なんでもバスケット：他者理解を深めるための遊びを行う。
- ③名前とリズム：リズムをつけながらニックネームをいい、他の参加者が繰り返す。  
トンネルシリーズ：参加者が2つのグループに分かれる。片方がトンネルをつくり、もう片方がくぐる。音を加える。役割を交替する。くぐる方が、場をリクエストし、トンネル役が音をつくり、目をつぶってくぐる。役割を交替する。
- ④名前とアクション：丸くなり、一人ずつ名前にアクションをつけながら前へ進み出る。それを他の参加者が繰り返す。  
ゲート突破：2つのグループに分かれる。片方のグループが、ペアになり、開閉するゲートをつくり、それに合わせた音をつくる。そのゲートをもう片方のグループが通る。最後の参加者が通るまで音を続ける。  
永遠のトンネル：2列になりトンネルをつくる。端からトンネルをくぐる、移動しながら次々にくぐり、トンネルを出たら、またトンネルをつくる。
- ⑤名前と返事：ニックネームを呼ばれたら、「ハイ」ではない言葉で返事をする。  
バランスを探す：ペアになり、両手を取り、後ろにそり、お互いバランスを取り合う。  
ここ！：ペアになり、一方が「ここ」といい、もう一方が聞く。聞いた方が目をつぶり、「ここ」と言った方が静かに移動する。一斉に「ここ」と呼び、ペアを探す。役割を交替する。  
音楽の旅：同じペアになり、両手を取り、片方が目をつぶり、もう片方がリードする。音楽に合わせてながらダンスのように動く。途中でファシリテーターが「交替」と言っ

たら、役割を交替する。

- ⑥花の名前：自分に花の名前をつける。  
宝を盗め：10名程度のグループに分かれて、一人が宝を盗む役になり、残りは丸くなり手をつなぐ。中央にベルなどを置き、宝に見立て、それを盗みだす。人が来たと思ったら、手と足で捕まえるようにする。役割を交替する。
- ⑦動物の名前：自分に動物の名前をつける。  
暗闇の旅1：一列に並び、前の人の右肩に右手を乗せ、目をつぶる。ファシリテーターが先頭に立ち、移動する。最後は、中央に入り。ぐるぐる回りながらとぐるのような形体になり、「終わり」と声をかける。  
暗闇の旅2：移動したところから、もとの部屋に目をつぶって帰る。
- ⑧ミラー・エクササイズ：ペアになり、相手と同じように音楽に合わせて動く。ファシリテーターが「交替」といったら、役割を交替する。最後にどちらがリードするのではなく、一緒に動くようにする。
- ⑨3人の会話1：3人組になる。一人が、二人の話を同時に聞き、応える。二人は、自分の相手との会話に集中する。  
1対全員の会話：一人が、数名から話しかけられる。応える人を親にみたくて、子ども役、近所の人などになって話しかける。  
3人の会話：3人組になる。二人が会話をして、残りの一人が会話に入る。役割を交替する。
- ⑩同窓会1：10名くらいのグループに分かれる。場の設定は、20年ぶりのクラス会である。グループから一人ずつ別のグループに入っていく。そのときに入ってきた人に注目する。  
同窓会2：10名くらいのグループに分かれる。場の設定は同じ。今度は、最初のグループ・メンバーの話に集中する。徐々にオリジナルなメンバーの数を減らしていく。
- ⑪賛否両論：ペアになり、話題を設定する。一方が賛成、他方が反対という立場を取り、同時に意見を言い続ける。
- ⑫二人で一人の講義：ペアになり、テーマを決める。二人で一人の講師役になり、テーマについて交替で話す。ファシリテーターが交替の合図を出す。他の参加者は観客の役をする。
- ⑬DIE 1：絵本からその背後にあるストーリーを作り出す。
- ⑭DIE 2：チラシからその背後になるストーリーを作り出す。
- ⑮全体を通した振り返り：それぞれの活動の関係性について討議する。

コウステイのインプロビゼーションでは、毎回違う名前を自分につける。しかし、日本の学生たちは、この活動の意味をとら

えにくいので、最初にニックネームを覚えるようにして、次にすでにあるものから名前を探す活動に変えた。そして、最後に自分に新しい名前をつける活動に変更した。

また、日本の学生たちは、初めての活動について、躊躇する傾向があるので、同じ活動を2回するようにした。

#### (5) クリエイティブ・パペトリーとクリエイティブ・ドラマというドラマを使った保育者養成プログラム

日本の学生の場合、他者とコミュニケーションしたり、自分自身を表現したりすることを躊躇する傾向がある。そこで、学生たちが、パペット（人形劇の人形）の背後に隠れることができるクリエイティブ・パペトリーを最初に経験するようにプログラムを構成した。学生たちが、十分にパペットを使った活動をした後で、自分自身が誰かになるクリエイティブ・ドラマの活動につなげるようにした。両者の間に「お店屋さんごっこ」を挿入することで、この移行がスムーズに行くように設定した。

- ①オリエンテーション：どのようなパペットを製作し、どのような素材が必要か、について説明する。
- ②バッグ・パペット：紙袋を使ったパペット
- ③ハンド・パペット：フェルト2枚を人形に切り縫い合わせたシンプルなパペットを使う。
- ④ソックス・パペット：靴下を使って口が開閉するパペットを作り、それを使って歌って踊る。
- ⑤スティック・パペット（ペープサーと）：2枚の紙の間に割りばし等を差し込み、両面に絵を描く。北欧昔話「三びきのやぎのがらがらどん」を劇化する。
- ⑥ダンシング・パペット：ベンベン太鼓のようなパペットを作り、音楽に合わせて動かす小作品を即興的に作る。
- ⑦ダンシング・パペット・ショー：グループごとに作った作品を見せ合う。
- ⑧テーブル・パペット：自分のつくりたいお店に合わせたテーブルの上で動かせるパペットをつくる。お店の絵を描く。
- ⑨お店屋さんごっこ1：自分の作ってきたお店と店主と使って、2グループに分かれて買い物ごっこをする。
- ⑩お店屋さんごっこ2：グループを分け、買い物に行っていないお店を訪問する。
- ⑪振り返り：作成したポートフォリオを見せ合う。「ラーニング・ストーリー」についての説明をする。
- ⑫「おおきなかぶ」の劇化：「おおきなかぶ」を劇化する。お互いに見せ合う。
- ⑬「おおきなかぶ」の応用：物語の構造を使

って、別の物語をつくり、演じてみる。お互いに見せ合う。

- ⑭昔話の劇化：「おおきなかぶ」以外の昔話を取り上げて劇化する。
- ⑮振り返り：クリエイティブ・パペトリーとクリエイティブ・ドラマの関係性、ポートフォリオ、「ラーニング・ストーリー」の日本への応用について討議する。

活動したことについて、「ポートフォリオ」を作成する。これには、パペットの作り方、活動内容、発展的活動、活動時の写真、パペットの写真、「ラーニング・ストーリー」などを含む。最初はレポートにしていた。しかし、パペットをさまざま製作し、それらを使って活動するので、写真や絵などをふんだんに使えるスクラップ・ブックを使った「ポートフォリオ」の作成に変更した。レポートから「ポートフォリオ」に変えたことによって、学生からさまざまな工夫や創造的な発想を導き出すことができた。さらに、学生同士でお互いに見せ合う機会も増え、コミュニケーションの機会を提供することにもなった。さらに、学生の写真を撮る技術を高めることにもなり、保育実践で応用できると考える。

#### (6) 今後の課題

- ①コミュニケーション能力だけでなく、表現力や社会性についても考えていく必要がある。特に、協働することに関する能力について検討していきたい。
- ②保育者養成だけでなく、社会教育へのドラマの応用について考えていきたい。たとえば、博物館、美術館、児童館などである。
- ③過程中心のドラマ活動から作品の上演を目的にした演劇活動へのつながりについて検討していく。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計6件）

- ①小林由利子、英米のドラマ教育の考察（4）—ジョー・ウィンストンのドラマ活動例の検討を通してⅡ—、東京都市大学人間科学部紀要、査読無、4巻、2013、33-46。
- ②中山京子・小林由利子、英米のドラマ教育の視点から見る定額船における劇活動—「へんしんおはなしつくり！ごっこ遊びからお話づくり劇きづくりへ—、帝京大学教育学部紀要、査読有、1巻、2013、87-96。
- ③小林由利子、英米のドラマ教育の考察（3）—ジョー・ウィンストンのドラマ活動例の検討を通してⅠ—、東京都市大学人間科学部紀要、査読有、3巻、2012、45-77。

- ④ Yuriko Kobayashi, Theatre for Young Audience as Culture of Children: Focusing on Programs for Children in Public Theatre, Youth Culture, Theatre for Young Audience and Art Policy Proceedings, 査読無, 2012, 4-10 & 29-34.
- ⑤ 小林由利子, 英米のドラマ教育の考察(2) —ジョナサン・ニーランズのドラマ活動例の検討を通して—, 東京都市大学人間科学部紀要、査読有、2011, 2巻、35-48.
- ⑥ Yuriko Kobayashi, Do Babies Really Need to See Theatre for Young Children? Korea Centre Babydrama Festa ASSITEJ International Symposium Proceedings, 査読無, 2011, 35-48.
- [学会発表] (計 12 件)
- ① 小林由利子, ドラマ活動というワークショップの記録と評価—オーストラリアとニュージーランドの保育実践記録からの示唆—, 日本演劇学会演劇と教育研究会、2013年3月24日、東京学芸大学(東京)
- ② 小林由利子, ドラマによるコミュニケーション能力育成のための保育者養成プログラム開発—お店屋さんごっこの検討を通して—, ドラマ/演劇による保育者養成プログラム、日本乳幼児教育学会第22回大会、2012年12月9日、武庫川女子大学・武庫川女子短期大学部(大阪)
- ③ 小林由利子・梶島香代・山本直樹, ドラマ/演劇による保育者養成プログラム、日本乳幼児教育学会第22回大会、2012年12月9日、武庫川女子大学・武庫川女子短期大学部(大阪)
- ④ 小林由利子・Young-Ai Choi・Shu-wha Jung, なぜ、今、児童演劇か? TACT/FEST 大阪(国際児童青少年演劇フェスティバルおおさか) 国際シンポジウム、2012年8月8日、TACT/FEST 大阪(阿倍野文化センター、大阪)
- ⑤ Yuriko Kobayashi, Teacher Training Program for Kindergarten and Nursery School Teachers to Understand Children's Natural Play through Drama Activities, Pacific Circle Consortium (PPC) Conference 2012, 2012年6月28日、梨花大学(ソウル、大韓民国)
- ⑥ Yuriko Kobayashi, Development of Teacher Training Program for Kindergarten and Nursery Schools in Japan through Drama/Theatre: Understanding Children's Play, Pacific Circle Consortium(PCC) Conference 2011, 2011年8月14日、オークランド大学(オークランド、ニュージーランド)
- ⑦ Yuriko Kobayashi, Theatre for Young

Audience as Children's Culture, International Symposium: Youth Culture, Theatre for Young Audience and Art Policy, 2011年7月24日、韓国国立劇団(ソウル、大韓民国)

- ⑧ Yuriko Kobayashi, Theatre for Children in Japan: The Latest Situation, Seminar in Department of Drama, 2011年3月11日、University of Chester(チェスター、UK)
- ⑨ 小林由利子, ドラマによるコミュニケーション能力育成のための保育者養成プログラム開発—インプロビゼーションからクリエイティブ・ドラマへ—, 日本乳幼児教育学会第20回大会、2010年10月23日、関西学院大学西宮聖和キャンパス(兵庫)
- ⑩ 小林由利子・梶島香代・山本直樹・山田真理子, 特色ある保育者養成カリキュラムの可能性—コミュニケーション能力・表現力の育成に着目して—, 日本乳幼児教育学会第20回大会、2010年10月23日、関西学院大学西宮聖和キャンパス(兵庫)
- ⑪ 岩田遵子・小川博久, 学級活動から演劇的表現活動へ—「ノリ」の連続性とその発展を通して—, 日本教育方法学会研究大会、2010年10月10日、国士舘大学(東京)
- ⑫ 小林由利子, 保育者養成におけるドラマによる「保育内容表現」プログラム開発(2)—昔話絵本を素材にして—, 全国保育者養成協議会第49回研究大会、2010年9月17日、甲府富士屋ホテル(山梨)

[図書] (計 5 件)

- ① 小林由利子, 萌文書林、保育に役立つストーリーエブロン、2012、100
- ② 小林由利子・石坂慎二・香川良成, アシテジ(国際児童青少年演劇協会)日本センター、アシテジ日本センターの歩み—日本の児童青少年演劇の国際交流—, 2012、47-78
- ③ 佐藤信編 小林由利子・中島裕昭・小川博久他, 論創社、学校という劇場から—演劇教育とワークショップ—, 2011、25-51.
- ④ 小川清美編著 小林由利子・森下みさ子・内藤知美・河野優子、萌文書林、演習 児童文化—保育内容としての実践と展開—, 2010、90-133.
- ⑤ 小林由利子編 アレン・オーエンズ&ナオミ・グリーン、図書文化、やってみよう! アプライドドラマ、2010、3&8-18.

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

小林 由利子 (KOBAYASHI YURIKO)  
東京都市大学・人間科学部・教授  
研究者番号: 50245297

### (2) 研究分担者

岩田 遵子 (JUNKO IWATA)  
東京都市大学・人間科学部・教授  
研究者番号：80269521

(3) 連携研究者

小川 博久 (OGAWA HIROHISA)  
東京学芸大学・教育学部・名誉教授  
研究者番号：60002698

中島 裕昭 (NAKAJIMA HIROAKI)  
東京学芸大学・教育学部・教授  
研究者番号：50217725